

TURN Tunes vol.4

♪「Talk to Listeners」のトーク内容の文字起こしテキスト

MC:稲継美保 ゲスト:和田夏実（インタープリター）

稲継 「はい、やってまいりました **Talk to Listeners** のお時間でございます。このコーナーでは音や声に興味がある人、そしてユニークな“きく”技術を持っている人、ずばり、リスナーズをお呼びして、たっぷりお話をしようというコーナーでございます。

リスナーと言うと、ラジオを聴いてくれている人を指すことが本来多いのですが、このコーナーではご自身の活動や研究・生活の中で「きく」ということを大事にしているゲストのこともリスナーと呼ばせて頂きます。つまり出演者もリスナー、聴いてくれている人もリスナーの Talk to Listeners。

それでは早速、今日のテーマは『水脈をきく 2021』

水脈。水の脈と書いて水脈です。一体どんなお話なんでしょうか。

ということで、本日のリスナーはインタープリターとして活動されております和田夏実さんです。和田さんよろしくお願ひします。」

和田 「よろしくお願ひいたします」

稲継 「ちょっとまず私の方からご紹介させていただきますね。

和田さんはろう者のご両親のもとで手話を第一言語として育ち、大学進学時に改めて手で表現することの可能性に惹かれます。

現在は視覚身体言語の研究、また様々な身体性の方々との協働から、感覚が持つメディアの可能性について模索されており、オリジナルのカードゲームやコミュニケーションゲームの創作、また美術館でのワークショップなど幅広く活動されております。

はい、ということで和田さん、改めてよろしくお願ひします。

まず、これを聴いてる人にとって、聞きなれない言葉がたくさん出てきたのかなと思うんですけども。インタープリターとして活動されているということで、そのインタープリターっていう和田さんのご職業…って言うていいんですかね…？についてちょっと説明していただいてもよろしいでしょうか。」

和田 「はい、あのインタープリターというのは、通訳っていうことを、インタープレートする・インタープリターって言うんですけども。その中でも私の中の定義としては、媒介者とか解釈者。どっちかって言うと解釈に近い方の定義として使っています。

大学4年生の時にインタープリターっていう肩書きで名乗り始めたんですけど、ちょうど大学2年生、3年生ぐらいから自分のやりたいことだったり、様々な方々との協働を通じたものづくりっていうのやってきて。それがある種の身体感覚とか、その感覚の変換作業だったりとか。特に（私の）専門がインタラクシオンデザインだったので、センサーを使ったりとか、そういうことを含めて、この変換作業っていうことを、ものづくりだったりとか体験だったりとかは、ワークショップを通してやっているなと思った時に、その見えなかった世界の魅力を再解釈したり、解釈して伝えるっていう事を広くインタープリターっていう定義・肩書きとして活動していけないかなっていう風に思ったのがきっかけで。

実は、あの実はと言いますか、博物館の学芸員さんもよく、自然科学の方がたまにインタープリターっていうお仕事が、ご職業があつて。それを、あの、自然科学という領域ではないんですけど、様々な世界のインタープリターでありたいなと思っている次第です。」

稲継 「なるほど。私、そのインタープリターって本当に面白い仕事だなあと、思って。やっぱり自分に引きつけて考えた時に、自分が俳優をしていることと、そのインタープリターの違いとか。『自分はじゃあ何してるんだろう？』みたいな。テキストがあつて、お客さんがいて、『なんかもしかして自分もインタープリターなの？』とか…。いやいや、でもなんかもっと違う考えがあると思って、今回お話しするの楽しみにしてたんですけど。

もういっこ、ご紹介の中で視覚身体言語、というのが出てきたと思うんですけど。視覚身体言語ってちょっとこれも聞きなれない言葉かなと思うので、教えてもらってもいいですか。」

和田 「はい。私自身が両親がろうだったこともあつて、手話を第一言語にして育ってきたんですけども。手話っていうとすごくこう定義が、いろんな言葉ゆえの意味だったり、その表し方とか、様々な考え方や定義があると思うんですけど。その中でも私の中では、視覚的なコミュニケーションであり、身体的なコミュニケーションであるっていう、もう少しメディアの方にフォーカスをして考えたいな一って思っていて。その人の体が何を紡ぐのかとか、その人の目が何を表すのか、みたいなことをちょっと考えたいなと思って“視覚身体言語”っていう風に呼んでいて。

あの、今ここで聞いていただいているのは、音声言語で、線的な、と言いますか…。すごくこう、今こうして喋ってる間にも『次どんな言葉が自分の頭から出てくるかな』とか、『どういう紡ぎ方をしたら筋道が立っているように線状に

おいていけるだろう』とかってことを考えたりするんですけども。もう少し視覚身体言語の場合は、頭の中に浮かんだ像だったりとか、今日の記憶だったりとか。あのコンビニの位置とかこの場所の位置とか、そういう位置関係とかが図になっておいていける感覚があって。」

稲継 「面的な？もっと立体なんですかね」

和田 「立体ですね。しかも時間軸がある立体なので。そういう、なんていうんですかね…。言語なんですけど、自分の中での体を使う時の使い方の違いとか、その時に起こる思考の違いみたいな事にちょっとフォーカスしたくて、視覚身体言語という風に書いています。」

稲継 「なるほど。そのまさに視覚身体言語のことと繋がると思うんですけども、今日のテーマが、『水脈をきく』というテーマなんですね。

これは、和田さんが、今年ですかね？アーツカウンシル東京のあるプロジェクトの中で、『つたえる、うけとる、つたえあう』っていう冊子を、和田さん企画制作で出されたんですけども、それ読ませて頂いて、その中に、水脈っていう言葉が出てきたんですよ。水脈っていうのは文脈ともしかして近いというか…なんていうか…文脈の言い換え？みたいな…いや、違うのかな…。文脈とはちょっと違うけど、私もすごく感覚的に、水脈っていう言葉がぴったりくる感覚を自分の中に持ってるような気がして、『水脈をきく』っていうことを是非話してみたいって思ったんですけど。その水脈っていう言葉を、和田さんの言葉でぜひ聞いてみたいです」

和田 「はい、ありがとうございます。この冊子自体が、2021年、今年の1月から3月までにかけて、手話通訳の方々だったり、様々な方にインタビューをしたり、ヒアリングさせていただいた上で、『通訳してる時の体ってどうなってるんですか？』みたいなことを聞いていくっていう。

声が聞こえてそれを視覚化していくとか、視覚的な表現というか手話を見てそれを日本語に変えていくっていう変換作業の時に、その人の脳内とか、体がどんな風に反応してきているのかとかにちょっと興味があるなと思って、そういった研究開発プロジェクトをやらせていただいたんです。

その時にお一人の方と話していて、その人の中に脈々と流れる水脈みたいなものを受け取れた時に、ちゃんと“乗れる”と言いますか。ちゃんと乗って通訳ができる感じがするよね、みたいな話をしていて。しかもその水脈って、私の中ではちょっと“懂れ”とかっていう言葉にももしかしたら近いかもしれな

いんですけど、何か湧き出ているんですよ。なんかその人の中からとか、その場所からとか、そのプロジェクトとかから、こう湧き出ている…。もしかしたらイメージの問題かもしれないですけど“文脈”って言うと文章の脈があって、それが前後が繋がってないとか、並びが変だとか、編集の際にその並びや意図を汲みながら編集をしなきゃいけないっていう、なんていうんですかね。もう少しかっちりとしたというか…」

稲継 「なんかわかります。」

和田 「歴史上にあるとか。何かそういう系譜のもとのもののような気がするんですけど。私の中での水脈っていう感覚はどちらかというと、意図みたいなのところとか、その人から溢れた、最初の初期衝動みたいなものとか、泉みたいなところの一番最初のポイントがつかめてさえいけば、逆にいうとちょっと言葉の言い換えがされてたりとか、文書自体が全然変わっていてもありだと思うというか。意識とか要約とかそういうことに近いのかもしれないんですけど。どうしても日本語と手話の場合は、一対一対応にならない言葉がたくさんあるので、そういった時に、文脈を捨てるか編集してくって作業よりかは、水脈に浸かるというか、水脈を受け取れた時にそこに乗った体が出てくるような気がするよねっていう。」

稲継 「え、すごい面白い！同じ本の中で、別の表現で、“イタコ”っていう言葉も出てきたりして。ちょっと水脈とかイタコとかって、何か近いのかなって思いながら、水脈、自分ではない相手の泉っていうか…全部これ今イメージの話ですけど、自分が乗れるっていう感覚は、それってやっぱり通訳の人独自の、というか、通訳の人にある感覚なんですかね？もしかして私と和田さんがこうやって直接喋ってても、相手の水脈をつかめる、みたいなことはあるのかなって思ってる。」

和田 「こうして話している時は、やっぱり私が私としていなきゃいけないので、なんか、乗る、とかじゃなくて、相手と自分の矢印がそれぞれにある、それが向かい合ってる感じがするんですけど。イタコ的にのるときはもう私は別に私じゃなくてもいいと言うか、すごい楽なんです。気楽にその人の水脈みたいなものに。」

例えばですけど、3、4冊出されている人とかの本を読んでも、『この人結局これに惹かれてやまないんだな』みたいなこととか。『こういうことが言いたいんだろうな』みたいなことがちょっとずつ、予測しちゃうわけじゃないんですけど

ど、『そういうことにロマンを感じてるんじゃないかしら』みたいなことが見え
てきたりとか。なんかそういう時に、水脈みたいなものを感じ取れるような気
がしますし…。

歴史研究家の方とかが、徳川慶喜のことを、『結局かっこよくなりたかっただけ
だよ』みたいに言ってる本をどこかで見て。政策とか、何かを選ぶ、選択す
る時ってそう簡単に理詰めで、『これが正しいから』って言って、選択ができな
いのが人間のいとおかしな部分だとも思っているんですけど。そういう、その
慶喜の中にあっただかっこよさ…みたいなものが」

稲継 「どんな時でもかっこよく、さ。みたいな？ (笑)」

和田 「そうそう。『かっこよくありたいんだよね！』みたいな。結局、50年
後の幸せを想像するよりも、この瞬間ちょっとモテたかったみたいなこととか、
そういうことが結局色んな人の中にある気がしますし、こうありたい姿とか、
ありたい、という他者的な目だけじゃなくて、どうしてもカブトムシに走って
いっちゃう子供みたいな。そういう、見つけたらこれに向かわざるを得ない、
マタタビと猫、みたいな。そういう水脈と言いますか、何か衝動みたいなのが、
いろんなところにはあるような感じがして。

それが、人の中にもありますし、もうちょっと法人とか会社とかにもあるし、
地域の中とかにも多分あって、それはこんこんと湧き出ているような気がしま
す。」

稲継 「なんかインタープリターのことを、“解釈者”って言ってたけど、今聞
いてると、“発掘者”みたいな感じもして。

イメージなんだけど、すごい小さい音で水が流れているイメージがあって、
耳を澄ませる…感覚器官としての耳だけじゃなくて、もっと体全体で、『どこに
あるんだその水脈は』って全身で飛び込んで行って、で、それを見つけて、そ
こから解釈者になっていくみたいな、なんかそういう、勝手にイメージしまし
た。」

和田 「ありがとうございます。でも確かに、すごくその水脈の発掘が難しい
時もあって。それは往々にして、この人の言葉じゃない言葉で喋ってる、とか。
なんか多分この人の職場とかその世界、その人がいる場所ではそういう言葉の
使い方や並び方で人を説得したりとか、プレゼンテーションとかするんだろ
うなっていう、戦闘のための言葉みたいなのが武装されてきた時に、その先にあ
るその人の水脈があんまり見えてこなくなっちゃう、というか触れなくなっ

やう感じがして。そういう時にこう…通訳の現場に入る時に一応読み合わせと言いますか、『今日の資料のもとでわからない言葉とかを教えて欲しいんです』みたいな時に、『あの、小さい時に好きだった遊び教えてもらってもいいですか?』みたいな、全然関係ない話をして。そうすると、『電信柱を数えてたんですよね』みたいな（答えが返ってきて）。それを結びつけるわけじゃないけど、（例えばその方が）ルールとか規則性みたいなことについて話されたいとしてた時に、電信柱を数えてしまっていた5歳のその方がいて、その方が今こういうお仕事をされているみたいなどころにつながってくると、なんか私の中でもすごくシンプルに…、通訳がシンプルになっていく、というか情報が削ぎ落とされていく、というか。良い意味で私が探す作業があまりなくなっていくとか。『何でこの人はこの言葉を使ったんだろう』とか、『どうしてこの言い方をするんだろう』とか、何かそういったことが、その人の中での自然な状態なんだみたいなことに近づいていける感じがあって。それは別に、常にポエティックである必要はもちろんないんですけど。でもなんとなく、温度が上がったなっていうような、その人らしさみたいなどころにちょっとだけでも触れておけると、その後の通訳とか、予測変換じゃないですけど、その人が、次にこの言葉を使うだろうなとか、こういう言い方、言い回しがあるだろうなみたいな時に、追いつける体でいられる、そんな気がします。」

稲継 「なんかすごい…。ちょっと今、懂れすら…。通訳の人の、その水脈をつかんだ時の感覚っていうのはもちろん私には想像することしかできないけど、もしかして、こうやって面と向かって話してる時にも、『話した内容ももちろんすごく良かったけど、なんかそれ以上に良かった!』みたいな感じって、もしかして、（それも）水脈なのかも…と思ったりもした。」

和田 「そうですね。」

稲継 「なんか同じ泉に入る、同じ、泉…なのかな?」

和田 「二人の中で泉が生まれるみたいな。」

稲継 「そうかも!どっちかの泉に入った、というよりは、話してる間にひたひたとしてきて、なんか、一緒に温泉入ったみたいな。気持ちよかったねーみたいな。(笑)」

和田 「素晴らしかったよね!みたいな。(笑)」

稲継 「なんか水で例えるのってすごいしっくりくる。あと、今おっしゃってた、戦闘モードとか、武装した言葉だとなかなか（水脈が）見つけれないっていうのも、すごく日常レベルでもある気がする。」

和田 「この『つたえる本』を作ってた時も、最終的に、「関係性の中で自分っていうものが日々生まれてるんだな」みたいなことをすごく感じる事があって。

その人の中に、水脈とか、もちろん憧れとか、何か真ん中にあるマグマみたいなものがあるって、それぞれに（そういうものを）持つ人と人が出会って。そうすると、その中にまた新しいものが生まれて、それが更新されていくっていうのがあるなって思いつつ。

でもなんていうか、やっぱり“教える・教えられる”の関係だったりとか、どちらかが持っているものを渡すだけの場面ももちろんありますし、それが良い悪いではなく、そういう“設定”みたいなのがそれぞれ様々な場所であって。

言語学の先生から（聞いて）、面白いなと思ったんですけど。私たちは、様々な語彙を持っているじゃないですか。頭は、辞書というか何千何万ぐらいの語彙を持っているはずなのに、（お店で）店員さんと話す時に、突拍子もない語彙を引っ張り出してることができないらしいんですね。」

稲継 「確かに！」

和田 「そこはもう持って来れないんですよ。やっぱり、目の前の人とか、その状況設定の中で引っ張り出せる言葉世界ってある程度決まってる。でもまあそれを『設定から変えましょうね』っていうことももちろんできますし、『この人とはいつもはこの設定の中で会話するけれども、ちょっとずらした設定で、今日は無礼講、じゃないですけど…今日はこっち側の語彙世界で一緒に喋ってみましょうよ』みたいなことも、たぶんできるんで。それが、遊びとかワークショップの持つ面白さだなとは思いますが。」

稲継 「なるほど。なんか、水脈を、きく…だけじゃないのかな、もっと全身で感じとる！みたいなことを意識して、今この瞬間から生きてみたら、何か変わるだろうなって思った。もしかして（今までも）無自覚にやってたことなのかも。もしかして人間はみんなやってることなのかもしれないけど。

印象的だったのが、その相手の水脈をつかめた時って、“楽になる”って言ってたのってすごい大事なことなんじゃないかなと思って。なんか、『楽でいいじゃ

ん』って思うんですね、誰かとコミュニケーションとる時に。もちろん厳しいコミュニケーションが必要な時もあるけど、楽でいられる、お互いがそのために水脈みたいなことを…お互いがちょっと協力して探しあったり、さっき言った温泉みたいなものを一緒に作っていく…。なんか通訳のことだけじゃなくて、もしかして我々がもうちょっと意識してみたら、いろんなことが変わるのかもって。」

和田 「最近やってる遊びなんですけど、電車の中とかで様々な人がいらっしゃる時に、『あの服はいつどこで出会ったんだろう？』みたいなことを考えることが好きで…。なんかすごいたくさんの方がいらっしゃるじゃないですか。で、靴から鞆、靴下、ズボン、全身でアイテムを、いろいろ装飾を、10点ぐらいはしてるじゃないですか。で、『これは、何年に出会って…、何を持って選んで…、今日それを選んできたんだ』みたいなことをちょっと想像すると、今この瞬間の今日という日に出会ったその人なんですけど、なんかその人たちが、様々な過去を引き連れて歩いてる人に見えてくる気がして。

なんかそうすると、話すことは急にはもちろんできないんですけど、『ああ、あの靴良いつて思ったんだなあ』みたいなこととか、『あのカバンを、パッと手に取って、何に惹かれたんだろうなあ、どうしてあの色を選んだんだろうなあ』みたいなことをちょっとだけ想像していた時に、洋服ってやっぱりすごく装うものなので、その人の水脈に近いような場所でもある気がしますし。』

稲継 「体に近いですもんね。」

和田 「本当にすごく愛おしくなってくるというか。個人的には、水脈を捉えようとするのは、自分にとってもある種の負荷が少ないというか、愛おしめるので、そのぶん、何て言うか…、分かり合えないって思ってる時に比べると、すごく楽になりますし。ちょっとイライラされてるのかな？って思ったとしても、なんか今日っていうその水脈が、その人にとっては…ちょっと水脈って言葉で合ってるのかわからないんですけど…タイミングとして、『ちょっとそういう意識の向かい方なんだな、今日は。』みたいな。

様々な関係性をちょっと想像すると、自分がその人に怒りの矢印を持つというよりも、本当に一点でしかその人とは今繋がってないので、そうじゃない、その人の持つ世界のことを思いを馳せられると、『じゃあしょうがないか』みたいな感じになる気がします。」

稲継 「もう（四六時中）ずっと、解釈されてるんですね…」

和田 「よくないかもしれないですが… (笑)」

稲継 「いやいや、そんなことない。すごい面白い。私は本当に、今この収録を終えた瞬間からやってみたくさんがたくさんある。

水脈を意識してみたい。人と話す時に。あと、お店に行って、自分の突拍子もない辞書が本当に出てこないのか。(笑) ちょっとやってみたい！あと人が身につけてるものから自分がどれぐらい想像できるのか、をやってみたいです。」

和田 「はい、是非」

稲継 「いやあ…すごい面白い…。これはもう個人的に、また…、一晩中話したい (笑)」

和田 「ぜひ、ゆっくりと」

稲継 「ありがとうございました」

和田 「ありがとうございました」

稲継 「今回のリスナーは、インタープリターの和田夏実さんでした。『水脈をきく』、どうもありがとうございました。」

和田 「ありがとうございました」